目次

第一講 演習問題[一]・[二]・[三]……p. 2
第二講 演習問題[一]・[二]・[三]……p. 12
第三講 演習問題[一]・[二]・[三]……p. 22
第四講 演習問題[一]・[二]・[三]……p. 32

第一講 演習問題 一・二・三

一 次は、具平親王作の「早秋に『秋は簟上より生ず』を賦す」と題する詩である。よく読んで、以下の各問に答えなさい。

秋至微涼①未足驚
初従簟(注1)上②漸応生
一身③暑気未施去
八(注2)尺商風展得□
暁後弥知煙(注3)竹滑
日中更愛④露花瑩
炎天与⑤汝相親久
莫恨⑥秋深月自軽

（『群書類従・第八輯』「本朝麗藻巻上」抜粋・一部改変）

注1 簟――細く割った竹をむしろのように編んだ夏季用の敷物。
2 八尺商風――八尺の長さの簟に吹いてくる秋風。
3 煙竹――靄に濡れた竹。

問一　傍線部①・②を、それぞれ平仮名で書き下しなさい。

①＝

②＝

問二　傍線部③「暑気」・④「露花」と対比されている語を、詩の中から抜き出して、それぞれ答えなさい。

③＝

④＝

問三　空欄□に入る最も適切な語はどれか。次の選択肢ア～エから選びなさい。

ア　響（ひびく）　　イ　激（はげしき）

ウ　清（すずしき）　　エ　強（つよき）

問四　傍線部⑤「汝」とは何を指すか。次の選択肢ア～エから選びなさい。

ア　篁　　イ　一身　　ウ　暁　　エ　炎天

問五　傍線部⑥の内容として最も適切なものを、次の選択肢ア～エから選びなさい。

ア　秋が深まると、月が一段と風情を増してゆくので、夏に見た月の記憶が薄まるように感じられる。
イ　秋が深まると、夏の間親しんだものたちの存在は忘れ去られ、月が何よりも慕わしく感じられる。
ウ　秋が深まると、涼しさに空気が研ぎ澄まされるせいか、月がなんとなく冷酷なものに感じられる。
エ　秋が深まると、一年の残りの月日が少なくなってくるので、時間の流れがあっけなく感じられる。

二　漢の高祖は晩年、呂夫人が生んだ皇太子を廃して、戚夫人の子を新たな皇太子に立てようとした。呂夫人は危機感を覚え、建国の功臣、張良（留侯）に策を求めた。張良は高祖がかつて側近に迎え入れようとしてできなかった四人の賢者（商山の四皓）を使って、高祖の心を変えさせる策を授けた。次の文章は、張良の策が実行に移され、「四皓」が高祖に面会した場面である。

漢十二年、上従撃破黥布軍帰、疾[a]益甚、愈欲易[b]太子。留侯諫、不聴、因疾[a]不視事。叔孫太傅称説引古今、以死争太子。上詳許之、猶欲易[b]之。及燕、置酒、太子侍。四人従太子、年皆八十有余、鬚眉皓白、衣冠甚偉。上怪之、問曰、「[1]彼何為者」。四人前対、各言名姓。上乃大驚曰、「吾求公数歳、公辟逃我。今公何自従吾児游乎」。四人皆曰、「陛下軽士善罵。臣等義不受辱、故恐而亡匿。窃聞太子[2]為人仁孝、恭敬愛士、[3]天下莫不延頸欲為太子死者、故臣等来耳」。

（『史記』留侯世家による）

（注）　上……漢の高祖劉邦を指す。
黥布……漢の高祖劉邦が項羽を破るのを助けた武将の一人。漢の統一後、劉邦に対し謀反を起こしたが、失敗し殺された。
留侯……張良のこと。
叔孫太傅……側近の一人、叔孫通のこと。「太傅」は、皇太子の守り役。
詳……ここでは、本音を隠して認めた振りをすること。
燕……宴会を開く。
鬚眉皓白……あごひげと眉が真っ白いこと。

問一　波線部ａ「疾」は、二度用いられているが同じ意味である。それと同じ意味で用いられている「疾」を含む熟語を、次の中から一つ選べ。

イ　疾走　　ロ　疾患　　ハ　疾徐　　ニ　疾風

問二　波線部ｂ「易」は、二度用いられているが同じ意味である。それと同じ意味で用いられている「易」を含む熟語を、次の中から一つ選べ。

イ　簡易　　ロ　難易　　ハ　軽易　　ニ　交易

問三　傍線部１「彼何為者」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

イ　彼らはいったいいかなる者たちだ。
ロ　彼らはなぜ皇太子に従っているのだ。
ハ　彼らはいつどこからやって来たのだ。
ニ　彼らは何の目的でここに呼ばれたのだ。
ホ　彼らはなぜあのような格好をしているのだ。

問四　傍線部２「為人」の読みとして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

イ　ひととなせば　　ロ　ひとをさむるに
ハ　ひとのために　　ニ　ひとたりて
ホ　ひととなり

問五　傍線部３「天下莫不延頸欲為太子死者」は、「この世の誰もが首を長くして太子のために身命をささげたいと思っています」という大意である。この大意に沿う読み方として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　天下莫レ不レ延レ頸欲下為二太子一死者上
ロ　天下莫レ不下延レ頸欲中為二太子一死上者
ハ　天下莫乙不下延レ頸欲中為二太子一死上者甲
ニ　天下莫乙不下延レ頸欲為二太子一死上者甲
ホ　天下莫乙不レ延レ頸欲下為二太子一死上者甲

問六　漢の高祖は最終的に皇太子を廃することを思い止まった。それでは、張良の策略とは、はたしてどのようなものであっただろうか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

イ　高祖が尊敬してやまない四人の賢者に、招聘を拒絶した真の理由を語らせて、高祖に己の人格的欠点を理解させ、皇太子を廃することがその傲慢さによるものであることを悟らせて、翻意を促すというもの。

ロ　高祖がかつて招聘しようとしてできなかった四人の賢者を呼び寄せ、彼らに高祖に対する世俗の悪評を語らせるとともに、今の皇太子を廃することがどれほど非道なのかを説かせて、翻意を促すというもの。

ハ　かつて招き寄せようとして拒絶された四人の賢者と高祖とを自然に引き合わせ、病状が悪化して弱気になっている高祖の心の隙間をねらって、賢者の高潔な人柄と考えに触れさせることで、翻意を促すというもの。

ニ　高祖に、己の不徳ゆえに招き寄せることのできなかった四人の賢者が皇太子にうやうやしく付きしたがっている様を見せつけ、さらに賢者の口から皇太子の人望の厚さを説かせて、翻意を促すというもの。

ホ　反乱軍鎮圧の疲労と体調の悪化により、ますます専横を強める高祖に対し、慎重の上にも慎重を重ねて、彼が全幅の信頼を置く四人の賢者を登場させ、彼らに腰を低くして説得させ、翻意を促すというもの。

三　次の文章を読み、後の設問に答えよ。なお、設問の関係で、送りがなを省いたところがある。

杭州戒壇焚毀。[A]朝命浙江布按両司重建。[B]所費甚広。因召湖州呉汝輝・嘉興曹艮等数人、勧募。汝輝入見[a]、請問[b]幾何。方伯曰、「度得銀万両則可。」汝輝曰、「願一力当之。」憲長楊継宗曰、「[C]何易若此。得無誑耶。」汝輝曰、「民有一子不肖。雖有所積、死後必為他人所取。[D]何如奉承勝事。」時両司官皆在、聞之称嘆。

（『寓圃雑記』による）

〔注〕杭州＝地名。　戒壇＝戒壇院。仏教徒に戒律を授ける式壇がある寺院。　浙江＝省（地方行政区画）の名。省都は杭州。
布按両司＝布政府と按察司という、ふたつの役所。省ごとにおかれた。長官はそれぞれ布政使と按察使。
広＝多い。　湖州・嘉興＝浙江省の地名。　呉汝輝・曹艮＝人名。　勧募＝寄付を募る。　方伯＝布政使のこと。
一力＝独力。　憲長＝按察使のこと。　楊継宗＝人名。　民＝ここでは一人称。　所積＝蓄積した財産。
何如＝比べていかがであろうか。　奉承勝事＝仏事に寄進する。

問一　傍線部Aを、口語訳せよ。

問二　傍線部Bを、全文ひらがなで書き下し文にせよ。

問三　二重傍線部a・bの読みを、ひらがなで記せ。

a＝　　　　　b＝

問四　傍線部C「何易若此。得無誑耶」とあるが、楊継宗がこのように考えたのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

問五　傍線部D「何如奉承勝事」とあるが、呉汝輝がこのように考えたのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

模範解答

【第一講】

〔模範解答〕

一

問一　①　いまだおどろくにたらず　②　やうやくまさにしやうずべし

問二　③　商風　④煙竹　問三　ウ　問四　ア　問五　イ

二

問一　ロ　問二　ニ　問三　イ　問四　ホ　問五　ハ　問六　ニ

三

問一　朝廷は浙江省の布政司と按察司に命令して（杭州の戒壇院を）再建させ（ようとし）た。

問二　つひやすところはなはだひろし

問三　a　まみ（え）　b　いくばく（なるかを）

問四　個人一人の力で戒壇院の再建をすることは不可能だと考えたから。

問五　愚かな息子なので、自分の死後、必ず財産を他人に取られることになるだろうから、それなら戒壇院の再建のため寄進するほうがよいと判断したから。

〈現代語訳〉

一

秋になって少し涼しくなったが、まだ驚くほどではない
最初は夏用の敷物の上から、だんだんと（秋の気配が）生じるはずだ
身体の暑さは、（秋がなんとかしようと）施してもまだなくならないが
八尺の長さの夏用の敷物に吹いてくる秋風は、（力を）発揮して涼しさを感じられる
夜明けの後に、ますます露に濡れた竹が光沢をはなっているのを知る
日中は、さらに露に濡れた花が輝いているのを愛でる
暑いときには、お前〔＝簟・夏用の敷物〕と長く親しんだ
恨むなよ、秋が深まると月（が何よりも慕わしく感じられること）に（より）自然と軽んじられることを

二

漢の十二年、高祖劉邦は黥布の軍を撃破して帰ったときから、病気がますます重く、ますます皇太子を交代させようと思った。留侯〔＝張良〕が諫めたが、聞かず、病気のせいで政務を行わない。叔孫太傅〔＝叔孫通〕が意見を述べて古今を引用し、死ぬことを覚悟で皇太子の件を論争した。劉邦は本音を隠して認めた振りをして叔孫太傅の言うことを聞き入れたが、やはり皇太子を交代させようと思った。宴会を開いたとき、酒盛りをし、皇太子が傍に控えた。四人が皇太子に従っており、年齢はみんな八十歳過ぎで、あごひげと眉が真っ白く、衣冠はとても立派である。劉邦が彼らのことを不思議に思い、質問して言うには、「彼らはいったいいかなる者たちだ」と。四人は前に進み出てお答えし、それぞれ姓名を言う。劉邦はそこでとても驚いて言うことには、「私があなたたちを求めるのが数年になるが、あなたたちは私を避けて逃げた。今あなたたちはどうして私の子に従って楽しんでいるのか」と。四人全員が言うことには、「陛下は立派な人物を軽んじてよく罵ります。私たちは道義として辱めを受けず、だから恐れて逃げ隠れたのだ。ひそかに聞くと、皇太子の人柄は思いやりがあり孝行で、恭しく立派な人物を愛し、この世の誰もが首を長くして太子のために身命をささげたいと思っていて、だから私たちは来たのだ」と。

三

杭州の戒壇院が焼けて壊れた。朝廷は浙江省の布政司と按察司に命令して（杭州の戒壇院を）再建させ（ようとし）た。かかる費用はとてつもなく多い。よって、湖州の呉汝輝・嘉興の曹艮たち数人を呼んで、寄付を募った。汝輝が（役所に）入って謁見し、どれくらいかかるのか質問した。布政使が言うには、「計算すると銀万両があれば可能だろう」と。汝輝が言うことには、「（私の）独力でこれに当たりたい」と。按察使の楊継宗が言うことには、「どうして簡単にそのようであるか。冗談だろう」と。汝輝が言うことには、「私には一人の愚かな子がいる。蓄積した財産があるが、（私の）死後必ず他人に取られるだろう。仏事に寄進することと比べていかがであろうか」と。そのとき、布政司と按察司の役人がみんなそこにおり、これを聞いて感心した。